Devil of a child

神崎 真由

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＳＰＲにバイトしたいとやってきた女子高生。
バイトメンバー最年少の彼女は優秀な能力者であった。
少しずつ明らかになる過去。
そして彼女には秘密があった。

目次

第一話　ハジマリ　1
第一話　ハジマリ　5
第一話　ハジマリ　8
第一話　ハジマリのその後　11
第一話　ハジマリのその後　15
第二話　震度4　19
第三話　右眼　25
第四話　永遠に共にあるには　29
第四話　永遠に共にあるには　34
第四話　永遠に共にあるには　41
第四話　永遠に共にあるには　47
第四話　永遠に共にあるには　52
第五話　永遠に共にあるには　その後　57
第六話　詰問　61
第七話　溝　69
第八話　束の間のバカンスと融和　76
第八話　束の間のバカンスと融和　81
第八話　束の間のバカンスと融和　85
第九話　似て非ざるもの　89

第一話　ハジマリ

とある５月の昼下がり。
渋谷の道玄坂にあるＳＰＲのオフィスにはイレギュラー達が来ていた。
美少女霊媒師の原真砂子、派手な見た目だが巫女の松崎綾子、歌って踊れる密教僧の滝川法生。
３人に飲み物を出す、苦学生の谷山麻衣。
「ここは喫茶店じゃないんだからね」
とお決まりのセリフを言いながら、飲み物を机の上においた。
穏やかな時間が流れていた。
しかし、その時間は扉が三回ノックされ終わることとなる。
「お客さんかしらね」
綾子がそういい、イレギュラー達がソファを空ける。
「どうぞ」
麻衣が扉の向こうの人に声をかけた。
パンツスーツ姿でＯＬ風の一人の女性が入ってきた。

前髪はキリッとした細い眉を出すように８：２に分けられ、長い黒髪は後ろで一つに束ねられていた。
「ここは渋谷サイキックリサーチで間違いないですか」
小顔で切れ長かつ大きな目で、ナルを彷彿とさせる漆黒の瞳。
そして透き通った白い肌。
いきなりの美人の登場に面食らいつつも、麻衣は、間違いありません、と答えた。
「私、神宮寺　真夜と申します。本日はこちらでアルバイトをさせて頂きたくて参りました」
彼女はそういい３０度の礼をする。
動きに合わせて長い黒髪はサラサラと流れた。
「…はぁ。話を聞きましょう。どうぞおかけください」
いくつかの言葉を交わし、履歴書を麻衣が受け取った時、所長室の扉が開いた。
「麻衣、そちらの方は」
「神宮寺　真夜さん、ここでアルバイトがしたいんだって」
麻衣は内心ヒヤヒヤしていた。
また、ナルの事だから、嫌味を言いまくるのではないかと。
「僕が話を聞く」

珍しいこともあるもんだと、麻衣は思った。
麻衣の隣に、ナルは腰掛けた。
「特技欄に、ＰＫ、霊視、透視とありますね。どの程度の実力か見せてください」
ナルにそう言われた彼女は、カバンからティーポットなどを出し、それらに手を触れずに紅茶を入れてナルと麻衣に振舞った。
一人でに動くティーポットやティーカップはまるで出来の良いマジックを見ているようだった。
ナルが紅茶を飲んで固まった。
「美味しくありませんでしたか?」
透き通った落ちついたトーンの声で彼女はたずねた。
「いいえ、肉親の入れる紅茶と同じ味だったものですから」
と答えながらナルはカップをソーサーに置いた。
「さすがにここでは霊視は無理なので、透視をしますね」
そういった彼女は、鞄から同じ形の黒い箱を１０箱出してきた。
「普通の箱です、お確かめください」
滝川と綾子が確かめた。
どこにでもある箱だ。

「これは、蓄光ビーズです。好きな箱に入れてください。私は後ろを向いているので」
ナルがビーズを入れているとき、麻衣はなぜ蓄光ビーズなのかと尋ねた。
「発光しているものの方が見えやすいのです。正答率を上げるためですね」
だからと言って、黒い箱から蓄光ビーズの光が漏れでることはない。
１０回ほど同じことを繰り返したがどれも外すことなく当てた。

第一話　ハジマリ

「どうして高校は通信制にされたんですか」
　ナルが彼女に尋ねた。
「ＰＫの源が溜まりすぎるのが原因です」
　聞いていた一同が「???」となったのを見て、彼女は鞄から数枚の写真を取り出した。
　植物が植木鉢やプランターに植わっているのだが、通常のチューリップや大根には見えなかった。
「これは?」
　ナルが写真を手に取りながら言った。
「溜まりすぎたエネルギーを植物に移して、ＰＫの暴走を止めていたのです。そうすると、このように肥大化、異常成長したんです。これなんて、本来は大根なのにまるでカブのようでしょう」
　彼女は写真を指さしながら言う。
「なるほど、大変興味深い」
　ナルの目が、良いデータがとれた時のそれになっていた。

「ナル、真夜さんに興味持ってるね」
綾子がティーカップを洗いに行って戻ってきて立っていた麻衣に耳打ちした。
「そうだね」
麻衣は素っ気なく返した。
彼女は朝エネルギーを移しても午後には溜まってきて暴走しないようにするのが大変だったので、高校は定時制にしなかったと説明した。
「そのエネルギー、人間にも移せますか?」
「やってみないと分かりませんが、出来るかと思われます」
ナルが手を差し出す、彼女が手を添える。
リンはサイコメトリを心配したが何も言わなかった。
「どうでしたか?ヒト相手にはしたことなくて……」
「問題ありません、成功しています」
ナルのその言葉に、彼女はほっとした様に少し笑顔になった。
ナルは久々に興奮していた。
死んだ兄、ジーンしか出来なかった「トス」が彼女は出来た。
驚いたことに、彼女はＰＫの持ち主であり、増幅の機能も持つ。
それだけ燃費が良ければ、エネルギーが有り余るのも仕方ない。

ナルとジーン２人でしていたことが、彼女は一人でできる。
「おい、ナル、すげえ嬉しそうじゃないか？」
ナルの微細すぎる表情の変化が読めるようになってきているＳＰＲメンバーにはそれがよく分かり、滝川の呟きに皆、心の中で激しく同意するのだった。
「では、最後に一つだけ。まだ１５歳なのに、どうして一人暮らしをしているのですか」
「「１５歳!?」」
ナルに彼女が答える前に麻衣と綾子と滝川が同時に突っ込んだ。
どう見ても２８歳ＯＬにしか見えない。
それが彼らの総意だった。
「彼らのことは気にせず続けてください」
「ええ……。両親とは仲が悪くて「なんで親御さん元気なのに一緒に暮らさないの」
彼女の言葉を麻衣が遮って言った。
「親はいつまでも生きてるわけじゃないんだよ、進学の為でもないのに、どうして!?」
直情的な麻衣は初対面の相手ということもあり、なんとか理性で押さえつけ叫ばなかったものの、怒りと悲しみが滲み出ていた。
「麻衣、やめろって。人には色々事情があんだよ」
滝川の発言を聞いた麻衣は、困った顔をした金髪の彼を睨んだ。

第一話　ハジマリ

「私、悪魔の子なんです」

そう突然言われ、あるものは戸惑い、あるものは意味がわからないという顔をした。

彼女は初対面の彼らに自分の過去―痛みの伴った記憶―を話した。

真夜は幼い頃よくポルターガイストをおこした。

皿を割ってしまうのなんて日常茶飯事。

遊んでいて、壁に人形をめり込ませたこともあった。

それに加えて、見えるはずのないものが見えた。

何もないところへ向って話している彼女を両親は気味悪がった。

彼女が原因の夫婦喧嘩が多かった。

母は彼女に辛く当たった。

殴られたことだってあった。

父はまるで彼女がいないかのように振舞った。

彼女が中学三年生の１２月に母は妊娠した。

お腹の子への影響を気にして、母は彼女を避けた。

彼女もそれを理解していたから近づかないようにしていた。
母も父もいつだって彼女を「悪魔の子」と言って忌々しく思い、畏怖していたことを彼女は知っていた。
年が明けた2月に、母に話があると言われ行くと……
『お腹の子と一から家族をやり直したいから、中学卒業したら一人で暮らして。お金は出すから』そう言われたんです」
なんと声をかけていいかわからない彼らの中でナルだけが「今まで大変でしたね」と声をかけた。
声をかけられるのはきっとナルしかなかった。
同じく血の繋がった親に愛されなかった痛みを知る彼にしか。
ナルの言葉に、彼女は微笑んだ。
色々なものを諦めてきた、そんな悲しい微笑だった。
「本当に、ごめんなさい」
麻衣が勢いよく深く頭を下げた。
「俺からも。うちの麻衣が悪かった」
同じように滝川も頭を下げた。
綾子が、あんたはいつから父親になったのよと突っ込みを入れながら、「この子悪気は

ないの、許してやって」と言った。
「そ、そんな、謝らないでください。その、気にしてません、大丈夫です！私、こう見えてタフなんです」
そう言った彼女はテヘッと笑った。
笑顔には１６歳相応の幼さが残っていて、滝川はさらに心が痛くなった。
「真夜さん～～」
彼女は泣いた麻衣に慌てた。
「え、えと、取り敢えずハンカチどうぞ。そのこういう時どうしたらいいかわからなくて……」
おろおろしている彼女を見てナルが麻衣に言う。
「さっさと泣きやめ。話が前に進まない」
「はいよー。すいませんでした」
ナルをギロリと睨んだ麻衣の目は涙が止まっていた。
「あなたを採用します、明日１０時にここに来てください」
「ありがとうございます」
こうしてＳＰＲに新しいメンバーが１人増えたのだった。

第一話　ハジマリのその後

「では、新しい人が増えたことですし、自己紹介してはどうですの」
真砂子のその言葉でその場にいた面々は自己紹介した。
「私達、あなたのことなんて呼べばいい？」
と麻衣が訊ねる。
「最年少ですし、真夜と呼んでいただければ」
「了解！私のことは麻衣ってよんで」
「……いや、谷山さんは先輩ですので、さすがに呼び捨てというわけには」
「う～ん」
麻衣が難しい顔をする。
「麻衣さん、でどうでしょう？」
「そうだね、そうしよう！」
「麻衣さん、所長さんはどう呼べば……」
「ナル！ナルって呼んで。由来はナルシストのナル」
それを聞いたナルが麻衣を睨む。

麻衣はそれを見てあっかんべーをする。
「お二人は仲がいいんですね」
「ありえません」「そんなことないやい」
二人が同時に真夜にツッコミを入れる。
皆がどっと笑った。
そんな時、滝川の携帯が鳴る。
少し話しただけで、切ったようだ。
「ぼーさん、どしたの？」
麻衣の問に「またスタジオに出たんだってよ」と滝川が答えた。
「ならわたくしも同行いたしますわ」
「いや俺だけで大丈夫だけど」
「違いますわ、真夜さんの霊視の実力を見せてもらうのです」
真砂子に滝川も賛成する。
「では、行くとしますか」
滝川は真砂子と真夜を連れてオフィスを出た。

オフィスｓｉｄｅ

「普通に話聞くなんてホント珍しいよね、ナル」
「そうだな」
「真夜が、美人だから?」
少しニヤリとして麻衣が言う。
「姿勢、服装に隙がなかった。だから、少なくとも冷やかし遊びの類では無いだろうと思ったからだ」
そう言って、ナルは麻衣に軽蔑の視線を向ける。
「へえ〜ナルもちゃんと人の事見てるんだねえ」
ナルは麻衣には返事せず、リンを呼んで所長室に入った。
「リン、真夜はアンチサイコメトリだ」
リンは机を隔てた前にいる白皙の美貌を見つめる。
言葉の意味をはかりかねた。
「といいますと?」
「僕は真夜をサイコメトリできない」
まだ詳しく調べたわけじゃないから詳しくは分からないが、と付け加えた。
「ナルは、真夜さんのＰＫや透視は本物だと思いますか」
「ＰＫは本物だろう。ジーンのように僕にエネルギーのトスが出来る。彼女自身もＰＫ

の能力者だから、僕が力を送らなくても増幅された力が送られてくる」
「ジーンの代わりができる、ということですか？」
「ああ、トスに関してはな。僕もようやくＰＫ解禁だ」
「良かったですね、しかし無理だけは「分かってる」
「透視は、今のところ白とも黒とも言えない。彼女にはサイコメトリが使えないから、嘘を見抜くこともできない」
　まあ、平気で嘘をつくタイプにも見えないが、といいナルはリンを見つめる。
「リンはどう思う」
「今のところは何とも。目を光らせておきます」

第一話　ハジマリのその後

スタジオｓｉｄｅ

三人はスタジオに向かって歩いていた。

「真夜ちゃんよ」

滝川に真夜は、はいと返事した。

「麻衣がああして噛みついたのは……」

「言ってもいいんですの」

真砂子が鋭く言う。

「麻衣を誤解されたくないから、な」

それを聞いた真砂子はツンと横を向いた。

「麻衣は孤児なんだ」

滝川が静かに言う。

「何かあるんだろうなとは思ったんですけど、そう言うことだったんですね」

麻衣の必死さを感じさせる言い方、何かない方が不思議だ。

「だから」
「ええ。麻衣さんの言葉がただ相手を非難しようとしたものではなかったので、私も理由を言おうという気持ちになったんです。彼女を責めたくて、とかじゃないんです。私は今回の件で麻衣さんを嫌に思ったりなんてことはありえません」
「よかった」
心の底からよかったと思った風に滝川が言った。
滝川に真夜は笑顔を返した。
「よし、到着だ」
「おい、法正。今日は両手に花か？」
滝川達を滝川の仕事仲間と思われる人が出迎えた。
「いらんこと言わんでいい。いつものとこか？」
「ああ」
滝川についていくと、いかにもスタジオという部屋にたどり着いた。
「どうや、真夜ちゃん」
真夜は何もない場所を指さした。
真砂子には、その先に初老の男性が見えた。
「あなた、除霊か浄霊はできて？」

「少しは……」
「なら、それほど害のある霊とも思えませんから、祓ってみてはどうですの」
　真砂子に指示され真夜が祓うことになった。
「私は、真夜と申します」
《……ワシはゲンゾウだ》
「残念ながら貴方はお亡くなりになっています」
《……そのようじゃな》
「なぜ、このような所に留まっているのです。天界へ行きましょう」
《……ワシだってそうしたかった。なのにワシの家族は焼いただけで葬式さえしてくれなんだ。ワシは念仏聞かんと天国へいけんと思っているからここにおるんじゃ！》
「なるほど……」
　真夜は滝川の方を向く。
「この方に、通常の葬式のお経を上げてもらえませんか」
「おいおい、それじゃあ」
「私が祓ったことにはなりませんが、仕方ありません。この方を浄霊するにはそれしかありません」
「それなら除霊に切り替えてはどうですの」

滝川は真砂子の発言に驚いた。
いつも除霊を嫌う彼女がなぜ。
「害のない方を除霊するのは気が引けます。叶えられる望みなら、それで悔いなく天に行けるなら叶えてあげたいと思います」
「真、夜さん」
真砂子は目を見開く。
自分と同じ考え方で驚いた。
「ぼーさんは歌って踊れる密教僧でしたよね？お願いできますか」
滝川はへいへいと言って数珠を取り出した。
「ゲンゾウさん、彼、見た目は僧侶ぽくないですけど、力のある御坊さんなのでちゃんと天国へ行けます、安心してください。お経を聞いて光の見える方へ行って下さい」
《……ありがとう》
滝川のお経を聞いてその霊は無事天に登った。

第二話　震度４

　私は神宮寺　真夜。
　数日前からＳＰＲでアルバイトをしてる。
「おはようございます」
「おはよー」
　先に来ていた麻衣さんが返してくれる。
「ふと思ったんだけど、真夜はどうしていつもスーツなの？すごく似合ってるからいいんだけど、私服の方が楽じゃない？」
「所長命令です」
「ええ!?ナルの？」
「大人っぽく見える方がいいとかなんとか言ってましたよ」
「むむむ～！ナルの好みか!?」
　いや、そういうのでは無いだろうと思った。
「学生に見えないので、相手に舐められないとか、そういう理由だと思いますよ」

自分で言ってて悲しくなってくる。
私はまだ１５歳なのに何度２０代（それも後半）にみられたことか……。
「ナルが実は、スーツ萌えとかだったら面白いけどねー」
麻衣さんがニヤニヤして言う。
ナル程萌えと言う言葉が似合わない人はいない……いやリンさんといい勝負か。
想像したら笑えた。
私が笑ったら麻衣さんも笑ってた。
「真夜、お茶」
所長室からだった。
実際、お茶を入れたのは麻衣さんだった。
習慣だと思う。
ナルはなんて言うだろうか。
嫌な予感はしたが、何も言えなかった。
すぐに麻衣さんは戻ってきた。
「真夜、ナルが呼んでる」
泣きそうな顔をしていた。

お盆の上のティーカップがなくなっているのが唯一の救いか。
「了解です」
所長室に入った。
「僕は『真夜、お茶』と言ったはずだが」
地を這うような声でナルに言われる。
「はい、そのように聞こえました」
ああ、怖い。表情は変わらないが、纏う空気が剣呑だ。
「では、なぜお茶をいれた麻衣に何も言わなかった」
麻衣さんはナルのことが……。
私はその上後輩だし。
「申し訳ございません」
頭を下げた。
「僕は理由を聞いている」
「麻衣さんの方が紅茶をいれるのが上手だから、です」
そう言うしかなかった。
「真夜がいれるお茶は僕の兄がいれる味と同じなんだ」
それは知ってる。

実はナルは本当は何者なのかも。
双子のお兄さんが亡くなっていることも。
私が、まだここの人達に伝えていない能力で知ったものだ。
紅茶のいれ方だって、能力を使って知った。
「だから、真夜が入れるお茶が飲みたくなる時もある」
「分かりました、次からは」
気をつけますと言おうとした時、軽く揺れた。
地震??
危ない、と誰かが叫んだ気がした。
次の瞬間、ナルの腕の中だった。
私の背後の本棚から本が落ちたようだ。
所長室の本棚の本はどれも相当分厚く、頭に当たれば下手しなくても死にそうなものばかりだ。
ナルは動かない。
「ナル、大丈夫!?なんか凄い音したけど……って、あ、ぇ」
麻衣さんが激しく扉を開け激しく閉めた。
これじゃあ、麻衣さんにとんでもない勘違いをされてそうだ。

「大丈夫か」
ナルは腕を解く。
「ええ、ナルこそ本、当たりませんでしたか」
「いや、当たってない」
床を見ると全て、私達二人を避けるように落ちていた。
「真夜、ＰＫ使ったのか」
ナルが本を拾いながら言う。
きっと本が熱をもっていたのだろう。
「反射的に使ってしまったようですね」
本を拾い終えた。
「真夜、お茶」
「はい」

ティーカップを持って所長室を出たが、麻衣さんがいない。
「リンさん、麻衣さん知りませんか？」
資料室に顔を出し聞く。
「さっき、胸が痛いとか言って帰りました」

精神的なものだから心配いらないとか言ってましたと補足が入る。

「そうですか」

心の中で溜息をついて、扉を閉めた。

第三話　右眼

「おはようございますー」

今日も真夜はバイトです。

いつも元気に挨拶を返してくれる麻衣さんはいない。

それもそのはず、今日は平日で午前１０時だからだ。

麻衣さんは高校２年生、そしてバイトも２年目。

だから彼女は１年上の先輩になるわけで。

「おはようございます、真夜さん。今日は、私が事務仕事を教えます」

リンさんがリンさんの小部屋（勝手に命名）から出てきて言った。

「承知しました」

とは言ったものの、まだリンさんとはほとんど話したことないし、気まずく……なるだろうなあ。

リンさんの説明は分かりやすかった。

そして思ったより、業務内容は複雑ではなかった。

「これで説明は以上です。何か分からない点があったら聞いてください」
「ありがとうございました。あの、お茶入れるので待っててください」
「はい」

真夜さんがお茶をいれに給湯室に消えた。
リンは溜め息をついた。
ナルに「目を光らせておきます」と言った以上、情報収集しないわけに行かない。
お茶を一緒に飲むのもそれの一環だ。
まどかとも麻衣さんともキャラクターの違う真夜さんにどう接していいか、いまいちわからない。
はぁ……。
本日二度目の溜め息をついた。

真夜はできたお茶を運ぶ。
「おまたせしました」
そう言って私はティーカップを二つ置いた。
リンさんが早速飲んでいる、猫舌ではないらしい。

「懐かしい味です」
「どうやら私のいれるお茶はナルのお兄さんと同じ味らしくて……。リンさんもお兄さんの紅茶を？」
「ええ」
リンさんの「ええ」で話が途切れてしまう。
気まずい……。
「リンさんの右眼」
「右眼」にリンさんが固まる。
触れちゃいけない話題だったのかも。
でも今更引けないし。
「すごく綺麗です、綺麗な青色」
不思議な感じのする、澄んだ色。
「……」
何故分かるって？
私は透視ができるから。
透視しながら町を歩けば、歩く人体模型達ｉｎ渋谷になるわけで。
たまーに、癌とか見つけちゃう、告知はできないけど。

「そう言われたのは初めてです」
よかった、それほど気を害したわけじゃなさそう。
「お茶ありがとうございました」
そう言ってリンさんはあの小部屋に戻った。

やはり彼女は本物の能力者なのかもしれない。
後ろ手に扉を閉めて、立ち尽くしてリンはそう思った。
私の前髪から瞳が透けるということはないだろう。
しっかり目を覆うように隠しているのだから。
綺麗です……か。
こうやって人に良い意味で驚かされることがあるから、まだ人を嫌いになりきれないのかもしれない。

第四話　永遠に共にあるには

６月、全国的に梅雨に入り、今日も雨が降っていた。
真夜がアルバイトを始めて一ヶ月ほど経っていた。
事務を麻衣と安原、来客対応を真夜というポジションが決まってきていた。

「すいません」
２０代と思われる女性が入ってきた。
雨の日の来客なんて珍しいと思いつつ席を勧める。
「彼氏を助けて欲しいんですっ」
切羽詰っているようだ。
「事情を教えて下さい。その上でこちらで調査できるか検討しますので」
麻衣さんが紅茶をだす。
彼女はそれに一口、口をつけると、話始めた。

その話をまとめるとこうなる。
？彼氏（嶋田　明）の元カノが過度の束縛気質
？彼氏は元カノのことを相談していた彼女（黒川　瞳）と交際
？彼氏が原因不明の高熱、元カノの夢でうなされる
？元カノの呪い？生霊？
ナルに引き受けるかどうかのお伺いをたてたところ「今までに生霊はあまり扱ったことがないから面白そうだ、引き受けよう」とのこと。
次の日、ナルとリンさんが事前調査しＳＰＲは調査に乗りだした。

ＳＰＲは郊外にある嶋田さん宅に来ていた。
「俺、生霊とか祓ったことないんですけどー」
ぼーさんがやる気のない声で言う。
「まだそうと決まったわけじゃないじゃん」
返事をしたのは麻衣さん。
今日も某親子は仲が良いようだ。
「ベースの部屋は」

ナルに頷きを返した黒川さんの案内で和室につく。
「ここです」
最初広いと感じたその和室も機材をおいてしまうと狭く感じる。
「本間サイズの六畳が狭いって相変わらず機材の量半端ねーな」
残念そうなぼーさん。
「本間サイズって何⁇」
麻衣さんがキョトンとした顔をして言う。
「うーん、畳にもいろいろあんだよ」
「本間は京間とも呼びます。それ以外にも、中京間、江戸間、団地間などがあって同じ一畳でも名称が違えば面積が違うんですね」
ぼーさんの代わりに安原さんが的確な説明をしてくれる。
「安原さんって博識ですね」
麻衣さん達が、安原さんのことを情報のエキスパートと言っていたのもうなずける。
「いやあ、それほどでも」
そして、この若干嘘臭い笑顔。
彼はなかなかの曲者かもしれない。
「麻衣、真夜を連れてカメラとサーモを持って嶋田さんの寝室へ。話が聞けるようなら、

聞いてこい」
「イエッサー」
寝室に入ると、何だろう、この感じ……。
「……なんか嫌な感じするよね」
麻衣さんのひそひそ声に頷きだけを返した。
麻衣さんが機材を設置している間に、私は嶋田さんに話しかける。
「嶋田さん、私達ＳＰＲの者です」
「瞳から、聞いて……ます」
話すのもしんどそうだ。
嶋田さんから事情を聞くのは諦めたほうがよさそうだ。
立ち上がった時、額縁にはいった絵が目に入る。
山の絵、ありきたりな物だ。
何気なく透視してしまう。
「……あれ？」
縦長の長方形の影が見える。
おかしいな、と思って壁から絵をとってみる。
裏返すと紙が貼られてある、それは御札だった。

「ちょっと、ぼーさん呼んできてもらえませんか、麻衣さん」
「え？うん、分かった」
これは良くないものだ、知識がなくてもそれは分かる。
「どうしたんさ、真夜ちゃん」
これ、と言い指さす。
ぼーさんの顔が険しくなる。
「他には？」
「分かりません」
「一旦ベースに行こう」
ぼーさんについて階段を降りた。

第四話　永遠に共にあるには

ベースに着いた。

「それは？」

「呪いのお・ふ・だが裏に張り付いた絵」

怪訝な顔をしたナルにぼーさんが絵を裏返して見せる。

リンさんは眉間にしわを寄せて顔を背けた。

そんなにヤバイ物なのかな……？

ぼーさんがきりっとした真面目な顔になる。

「ナル坊、あの部屋、それだけじゃないかもしれないが、良くないのは確かだ。嶋田さん、ここにいない方がいい」

「そうか……。黒川さんに説明する」

嶋田さんには近くのカプセルホテルに泊まってもらうことになった。

今回は呼んでいなかった綾子さんを急遽呼び付き添ってもらうことに。

黒川さんには家に残ってもらった。

ホテルに着いた頃にはすっかり熱が下がったと、嶋田さんから連絡があった。

家にいるＳＰＲメンバーで各部屋くまなく探した。
寝室には御札に加えて髪の毛の束まであった。
私はリンさんとペアを組んでいた。
「真夜さん」
「はい？」
珍しくリンさんから話しかけてくれた。
「人はどうして、ここまで執着出来るんでしょうか」
「愛と憎しみは似てるから、ですかね」
私も実際のところ分からない。
誰かに恋したことも、愛したこともない。
「この呪いは、対象をいずれ殺してしまう」
リンさんは髪の束を見つめ呟く。
「元は愛だった筈なのに、こんなにこじらせて。こんなことしても、誰も幸せになれないのに」

ベースに戻ると、計　御札２０枚　髪一束。
リンさんが燃やし清めた。

「もうそろそろ、６時ですけど夕飯どうします？出前取りましょうか？」
「いえ、お気遣いなく」
黒川さんの提案をナルが断る。
「どっか食べに行かねえ?!」
「うーん、でもお店ある？」
ぼーさんと麻衣さんが話しているのを聞いて黒川さんが「大和」という店を教えてくれた。
「日本食がウリのお店です」
とのことだったので、ナルとリンさんも連れて食べに行くことに。
黒川さんは一旦自宅に戻るとのこと。

大和に着いた。
ナルとリンは精進料理を食べていた。
真夜、麻衣、滝川、安原は寿司セットを頼んでナル達とは少し離れたところで食べていた。

真夜はイカを食べていた。
実は私の大好物はイカだったりする。
まろやかな味とコリコリ感が好きなのだ。
「あ～～！イカがっ!!」
声を上げたのは麻衣さんだった。
ラスト2を私が、ラスト1をぼーさんがとったところだった。
「ふっふっふっ！」
ぼーさんは麻衣さんの前でイカをパクリっ。
「あああああ！」
「麻衣さん、どうぞ。私、けっこうイカ食べたんで」
取ったけどまだ食べていなかったので麻衣さんにと思った。

「い、いらないもんっ」
「え？どうして？」
少し傷つくよ、それは。
「こーはいのは、センパイとして貰えない」
ぼーさんに見せつけるようにドヤ顔の麻衣さん。
「こ、後輩!?」
次に声を上げたのは安原さんだ。
「はい。今、１５歳なんでＳＰＲメンバー最年少です」
安原さんが目をぱちくりさせて固まっている。
「じゃあ、お言葉に甘えて。ありがとうございます、麻衣先輩」
イカのおすしを、パクリっ！美味しい!!
「安原さん、いらないならマグロ貰っちゃうよ」
と麻衣さん。
「俺も」
とぼーさん。
「私も♪」
悪ノリして私も。

「あああああマグロォォォォ!!」
壊れた安原さんを笑う他三人。
しかし、安原さんは立ち直るのも早かった。
「マグロの恨み、近いうちに必ず」
ビシッと私を指さして、芝居がかった声で言う安原さん。
「あははは っ!」
思わず笑ってしまう。
麻衣さんには女声じゃんと言って笑われる始末。
「そろそろナル達が食べ終わってるんじゃ……」
三人に声をかける。
私達はナルとリンさんを見た。
こちらからは背中しか見えない。
二人並んで座った彼らは……。
「親子、みたいじゃね」
ぼーさんがしみじみとしている。
「あんな偉そうな子供嫌だっ」
麻衣さんの発言に四人で笑う。

確かに、私が親ならああいうタイプは遠慮したい。
ナルがこちらを見た。
不機嫌オーラ出てます、所長。
「そろそろ怒られるから行こう」
不機嫌を察知したらしい麻衣さんは駆けていった。
私達もそれに続く。
大和を出たところで黒川さんと合流した。

第四話　永遠に共にあるには

その頃、綾子は嶋田さんがいるホテルに来ていた。
「こんにちは、あんたが嶋田さん？」
「はい。派手な格好の巫女さんってあなたですか」
「あってるわ。私、松崎綾子」
「松崎さん、宜しくお願いします」
嶋田さんは頭を下げた。
「とりあえず、これ持っといて」
私は御札を彼に渡した。
話聞いた感じだと家に問題があるだけっぽいし、これで問題ないでしょ。
こんな楽な仕事で給料出るなんて、今回はラッキーだわ。

夜十時、何だかんだでお酒を飲んでいた。
別に、私が勝手に飲み出したわけじゃないのよ。
一応、仕事中だしってことで断ったんだけど、嶋田さんが強く勧めるから仕方なし。

一人で飲むのもつまんないもんねえ。
にしてもコイツ何なの、潰れんの早すぎ。
「酔うの早すぎません？」
「まっだ、よおてませんよお～」
クダ巻いて酔ってないもなにもないわよ。
つまんないのー。
でもタダでお酒飲めてるんだし、良しとするか。

1瓶飲みきって、そろそろ自分のとったホテルの部屋に戻ろうとしたとき。
「……ナ……カ、ナ……」
「カナ？寝言？」
彼女は確か、瞳さんだっけ？
別の女の夢見るなんて、いただけないわね。
ふと、背後に気配を感じた。
嫌な感じ。
振り返っても振り返らなくてもヤバイ。
根拠は女の勘。

仕事なのに酒飲んだ罰？
「はぁ……、ついてないわねえ」
振り返った。
近くに女の顔。
「ヒッ……」
奇跡的に大きな声を上げずにすんだ。
しかし、目が合ってしまった。
不気味だった。
なんとも言えない顔をしている。
愛と憎しみも併せ持った表情。
隣の男は起きない。
「冗談じゃないわよ……」
目を逸らせば負ける。
私一人なら、九字でなんとかして逃げるけど、二人じゃ無理。
睨み合ったまま朝を迎えた。
朝日が顔を出した頃、その女は消えた。

調査二日目、朝。
ベースには安原、滝川、ナル、リン、綾子、麻衣、綾子がいた。
「どういうことよ」
剣呑な声の綾子さん。
何があったのかと真夜はヒヤヒヤする。
「変な女の霊が出て、朝まで睨み合ってたの！聞いてないんだけど、あんなの出るって」
ナルが綾子さんに視線だけよこす。
ちょっと怒ってる？
あ、これはデータ撮り損ねたからだな。
「巫女なんだから、なんとかできないのかよ」
ぼーさんの発言で、綾子さんが目の前の金髪を睨みつける。
「はあ!?私一人しかいないんだったらなんとかしたわよ。戦力になんない男一人つれて逃げなきゃいけないのに、最低戦力になるやつ二人は必要よ！」
ふんっとぼーさんは横を向いてしまう。

綾子さんもツンとしてベースを出ていく。
私は彼女を追いかけた。
「綾子さん」
「なによ」
「想定外だったんです」
「はあ？」
綾子さんが意味がわからないという顔をする。
「出るって分かってたら、綾子さん一人で行かせたりしません、ナルは」
「新米のあんたに何がわかるっていうのよ」
「出るって分かってたら、ナルならカメラの準備をしないはずありません」
綾子さんの表情が柔らかくなる。
「新米の癖によくわかってるじゃない。こういう仕事は予想外な事が起きることの方が多いもの、ナルの想定外なら仕方ないわ」
よかった、機嫌がなおって。
後ろからとたとたと足音が聞こえた。
「綾子」
麻衣さんだった。

声の響きが不安げで。
振り返り、私は笑顔を見せる、大丈夫だと示すように。

少し話してから三人でベースに戻った。
「何してたんだよ」
ぼーさん、そろそろ黙っておけばいいのに。
「秘密」
即答した綾子さん。
こりゃあ根に持ってるなあ……。
「麻衣なら教えてくれるよな」
「えー秘密っ」
麻衣さんにも裏切られ沈むぼーさん。
「本題に入る」
ナルの声で、皆がビシッとなる。

第四話　永遠に共にあるには

「ナル、夢見た」
　麻衣さんの夢はただの夢ではない。
　彼女に皆の視線が集まる。
「女の人が泣いてる。……『明に会いたい』って」
「それだけか」
　ナルの問いかけに、麻衣さんは頷く。
「時間帯は？」
「あっ、暗かったから夜かも」
「バカ」
　ナルにそういわれ、麻衣さんはむくれた。
「原さんを呼ぶ」
　連絡から1時間後に彼女は到着した。
「実際に見てませんから、断言はできませんわ」
　言葉の割に悠然とした表情で原さんはナルを見つめる。

「予測、で構いません」
その言葉を待っていたと言わんばかりの、艶やかな笑み。
「――生霊かと思われますわ」
「生霊って普通の霊とどう違うんですか」
安原さんが尋ねた。
「生霊は生きている人の魂の欠片。特定の誰かに執着するあまり自らの魂の欠片をその人にとばしてしまうんですの。欠片の送り主を説得しない限り生霊から解放されることはできないのですわ」
ということで、原さんとナルは元カノさんを説得しに行くことになりました。
麻衣さん、そこで悔しそうにしなくても……。
嶋田さんは「引越ししていなければ、ココのはずです」と言って住所を教えてくれた。
名前は上橋　佳奈。
念のために顔写真も見せてくれた。
可愛い系の人だった。

ナルと真砂子は依頼者の元彼女との話し合いを終え、嶋田さん宅へと戻るため歩いているところだった。

ちょうど家が見えてきた辺りで僕は嶋田さんと黒川さんに会った。

買い物に行っていたようだ。

「佳奈……何て言ってました?」

恐る恐る嶋田さんが聞いてきた。

「上橋さんも自分が生霊を送っていることには気付いていないようでした。強い相手への思いが知らず知らずのうちに生霊になっているというのはよくあることです」

「そうですか」

「『知らなかったとはいえ、迷惑かけてごめんなさい。これからは気を付ける』と言ってました」

それを聞いた嶋田さんは喜んでいたが、どうも腑に落ちない。

僕の思い描いてた「元カノ」のイメージ像と違った。

イメージはどこから来た?

呪いの御札、髪の毛の束……動機は?

「――そうか」

背後で音がした。

砂利を踏む音。
他の三人は気付いている様子はない。
ゆっくりと振り返る。
「下がれ！」
僕らに気付かれたことを知った上橋さんは形容し難い雄叫びをあげて走ってきた。
手には銀色に光る――ナイフ。
「ナル！」
背後からリンの声が聞こえた。
逃げようにも、後ろには嶋田さん達と玄関扉。
ＰＫを使おうにもチャージの時間が足りない。
ジ・エンドだ。
残された手段はない。
こんなところで終わってしまうなんて情けない。
「ナルっ！」
麻衣か。
目を閉じた。
僕にも怖いものがあるらしい。

死ぬのが、怖い。

ジーン、お前もそうだったのか？

「いやあああああぁぁぁ――――――――」

麻衣の空気を裂くような悲鳴が響いた。

第四話　永遠に共にあるには

僕の腹にナイフが刺さる音ではなく、地面に重い物が落ちるような音がした。
目を開く。
「あれ？」
「ナル！良かった、良かったよ……」
麻衣が抱きついてきた。
僕は、生きているのか？
少し離れた前方に真夜が倒れている。
不可解すぎる、まるで夢のようだ。

ナイフを持った女は滝川が取り押さえにいった。
リンは砂利の上に横たわる真夜の元へ向かう。

ナルを助けたのは真夜さんだ。
もう私も無理だと諦めたとき、真夜さんが横から走り出てきて鮮やかな飛び蹴りをかまし、ナイフを持った女が宙を舞った。
女が宙を舞っているとき、真夜さんはＰＫをあて、女は芝生に落ちた。
果たして、距離を稼ぐためだったのか、女に怪我をさせないためか……本人に聞かない限り分からない。
女はいいとして、真夜さんが落下したのは砂利の上。
大丈夫だろうか。
「真夜さん」
「痛たたたた……」
ぱっと見ただけで数カ所は傷をしている。
打撲も酷いに違いない。
「間に合って、良かった」
真夜さんは上半身を起こす。
ナルの生存は聞こえてくる麻衣さんの声が伝えている。
「動けますか……？」

「えーっと、リンさんが肩貸してくれたら動けると思います」
真夜さんは苦い顔をしていた。
人は助けても、誰かを頼るのは苦手なのかもしれない。
「右ですか、左ですか？」
「右足首です、捻挫だと思うんですけど……」
ズボンの裾を上げて見てみたら、赤くなり少し腫れているようだった。
「分かりました」

真夜はリンに抱き上げられた。
少女漫画定番の「お姫様抱っこ」である。
「肩貸してもらえれば歩けます！」
「こちらの方が安全です」
いいいや、そういうことじゃなくてっ！
トリプル級に恥ずかしい。
いや、これはもう恥ずかしさでキュン死するとかどっかの誰かが言ってたけど、私も

そんな風になるのかっ！
あ〝あ〝あ〝あ〝ー！
どうすればいいんだあああ！
でも冷静になって考えてみれば、リンさんも良かれと思ってしてくれてるんだよね？
恥ずかしがってたら、悪いのかも……
そう思って身を預けてみた。
見た目よりしっかりした肉体で、なぜだろう安心する感じ。
「どうしたの、真夜!?そんなにボロボロになって」
走ってきたのは綾子さんだった。
そう言われてみると確かにボロボロだった。
服は砂で汚れシャツは少し穴が空いている。
「応急処置お願いします」
リンさんはそう言ってから、ソファーの上に私を降ろしてくれた。
「リンさん、ありがとうございました」
「……いえ」
リンさんはいつも通り素っ気ない返事をし部屋を出ていった。
「女子の夢！『お姫様抱っこ』を叶えた気分はどう？」

興味津々という風の綾子さん。
「恥ずかしかった、です」
そりゃあ、本当に、もう。
「うぶねぇ～」
そうだ、忘れてた。
私が嶋田家から外出していた理由を。
「すいません、綾子さん。この庭の畑のところに鞄を放置しててその中にリンさんに頼まれていた書類が入っているので、そのことをリンさんに伝えて欲しいんです」
「りょーかい。手当するものも取ってくるから待ってて」
部屋には私一人になった。
見回してみると、豪華な照明、立派なソファー。
どう見ても応接間……だ。
「汚してたらどうしよ……」

綾子が戻ってきて、真夜が痛みに耐えてる間、客間の扉には〝治療中　男入室禁止〟の貼り紙がされていた。

第五話　永遠に共にあるには　その後

真夜は綾子とともに病院に来ていた。
一応医者に見せとけというナルの指示でだ。
やはり捻挫という診断で、湿布臭をあたりに撒き散らしていた。
今、真夜と綾子は受付のロビーにいる。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「真夜、聞いたわよ。あんたナルの命救ったんでしょ」
「ええ」
綾子さんは誰から聞いたんだろう。
リンさんは多くを語るタイプじゃないから麻衣さんかぼーさん辺りだろうか。
「それなのに、なんで自分から言わないわけ？」
「言うほどのことでもないと思いまして……」
それにあんまり詮索されたくなかった。
「人の命を救うってのは凄いことなのよ。もっと誇りなさいよ」

「はあ……」
こんな気の抜けた返事しか返せない。
だって私はまだあの時の判断を迷っている。
ナルの運命をあんな形でねじ曲げてしまったことは果たして正しかったのか、と。
「私の親は医者なのよ。以前言ってたわ、医療は命を救うから素晴らしいって。来るはずのなかったその人の明日を与えることができるからって」
「はい」
「でもね、その分医療ミスが許せないし怖いって言ってたわ。来るはずのその人の未来を奪ってしまうから」
「いいお医者さんですね」
綾子さんが力強く笑う。
「あったりまえよ」
そういう自信が羨ましかった。
私にはない輝きだった。
今まで、常人を超えた能力は私に迷いだけを与えてきた。
これからもきっとそうだ。
救うべきか救わざるべきか、教えるべきか否か……迷うことはたくさんあった。

そこから学んだことはひとつ。
常人を超えた力でどれだけの善を成したところで、常人を超えた力を使った時点で善行とは見られない。
疑われるのがオチだ。
それは私を周りの人間たちは常人の基準で測ろうとするから。
だから常人を超えた人の集まりなら、それを避けられるのではと思ったから、ＳＰＲをバイトに選んだ。
そこの所長だからナルを助けようと思った。
なのに私はこうして今も悩んでいる。
それは本当に正解だったのか、と。
「真夜？」
「……は、い」
「大丈夫？足痛むとか？」
「それは大丈夫です」
「いきなり黙るから心配したわよ」
「すいません……」
綾子さんが顔をのぞき込んできた。

「あんたは色々なものを持ってる。だけど自信が足りない、本当に勿体無いから何とかしなさい」

受付の人に呼ばれる。

代わりに綾子さんが行ってくれた。

あなたなら、私が迷い込んだ袋小路の突破口を知っている気がする。

答えを探すように彼女の背中を見つめ続けた。

第六話　詰問

「先日の殺人未遂事件について、真夜に幾つか聞きたいことがある」
私がオフィスに着くなり、所長室に呼び出された。
そして、ナルの第一声がこれだった。
ナルが座る斜め隣後ろにはリンさんが立っていた。
まるで秘書の様だ。
「佳奈さんの件なら目撃した人から聞かれた方が詳しい事が分かると思いますが」
私はまず、最初からあの場所にいたわけではない。
「僕が知りたいのはそういうことではない」
じゃあ、何を?
意味がさっぱり分からなかった。
「自ら説明したする方が真夜の為だと思ったが、言わないのならこちらから言わせてもらう」
ナルは背もたれにもたれ、ギュッと音がなる。

机を挟んで立っている私を、人間味のない感情の取り除かれた無表情が見上げる。
「僕は、真夜があの事態を前々から予測、またはそうなるよう仕組んだ、のではないかと考えている」
私に発言も求めず、ナルはさらに続けた。
「まず、リンに頼まれていた書類を取りに渋谷のオフィスに行った。オフィスから嶋田宅まで1時間はかかる。勿論、公共交通機関を利用して。その距離を４０分で嶋田宅に着いている、普通は不可能だ」
ナルは一枚の紙を机の上に出した。
白く細長い指が紙をなぞる。
どの経路でも1時間、それ以上かかることが示されていた。
「もう一つの疑問点はなぜ上橋佳奈の制圧にＰＫを使わなかったか、だ。目撃証言によると真夜は飛び蹴りをした様だが、確実性はＰＫのほうが高い。ＰＫを使えなかった、もしくは敢えて使わなかった。そう考えるのが妥当だ」
「４０分に短縮のトリックはおいおい考えるとして、まあ真夜が話せば早い話だが、短縮したのはあの事態になることを知っていたから、とすれば一つの結論が見えてくる」
表情のない顔に口角だけが少し上がり、絶対零度の冷たさを漂わせる。
「真夜、君は僕を傷ついてまで助けるヒロインになりたかっただけ。そんな安い芝居に

僕が騙されると考えていたとは。１５歳とは言え残念な脳味噌だ」
嘲笑といった風にナルが言った。
ここまで曲解されることになるなんて、考えもしなかった。
ナルの言葉が体中に突き刺さり見えない血を流してた。
「短縮は難しい話ではないです、ただ自分の脚に弱めのＰＫを持続的に使ったら可能です」
念力で脚を動かしてしまえばいいのだ。
イメージトレーニングと少しの訓練で私はそれができるようになった。
それを使えば速い速さを保って長い距離を走ることができる。
「なるほど」
頬杖をつきながらナルが相槌をうつ。
「嶋田宅に着いた時にはあの状態でしたので、ＰＫをチャージしなおす時間がなくて飛び蹴りをしました」
「傷だらけにはならない予定だったのですが、慣れない事をしたので着地に失敗した私のミスです」
まだ説明しきれていないことがある。
黙ってしまえばナルから追及されるのは避けられない。

だけど本当のことをいうわけにはいかない。
私のあの日のトラウマを引き出すことになる。
あの日にもう二度と人には言わないと誓ったのだから。
「短縮しようとした動機は？」
やはりナルは私を逃がしてくれるつもりはないらしい。
「嫌な、嫌な予感しました。早く戻らなきゃいけない……と思いました」
佳奈さんの……殺意。
歪んだ愛に満ちた心。
殺意があるからといってすぐに実行にうつされることばかりではない。
念のため急いだら、ギリギリだったのだ。
「話は以上です」
冷たくピシャリと言い渡された。
私の言ったことなんて、信じられていないんだろうな……。
素早く軽く一礼して所長室を出た。
さっきまで感じていなかったはずの血の味がする。
唇に舌を這わせる。
やっぱり、か。

私は何かを堪えるとき唇を噛む癖がある。
血の味のせいか胃がムカムカとする。
トイレに駆け込んだ。
胃の内容物が白い便器の中にどんどん出ていく。
「……っく……！」
涙が勝手に流れていく。
バイト先なんかで泣きたくなかった。
帰るまで我慢しようって、所長室では思ってたのに。
意志に反して流れていく。
やがて吐きたくても胃の内容物もなくなってしまった。
体の中まで空虚になった。
手の先からじわじわ痺れていく。
寒い、寒い寒い。
六月だというのに私はトイレで座り込んで震えていた。
虚しかった、ナルにあんな風に言われて。
なりふり構わず飛び蹴りして、あのままだと佳奈さんが砂利の上に落ちて怪我したらと思って芝生までＰＫ使って飛ばして、でもそれで自分の着地は犠牲になって。

ボロボロになって、捻挫もして。
人命を救う、それだけを考えて駆けたのに自分の心は踏みにじられた。
やはり人を超えた力なんか使って運命を変えてはいけなかった。
もうやめよう……こんなこと。
バイト中に油売ってると思われても困るしそろそろ出よう。
水道のところで顔を洗ってから自分の顔を見た。
真っ青過ぎて、一瞬自分じゃないのかと思った。
色をなくした唇に噛んだ傷だけが鮮やかな赤で嫌に生々しい。
「リンさんに心配かけるな、こんな顔してたら……ってリンさんもナルと同じ考えかもしれないじゃん」
つぶやいてしまったことで自分の中での現実味が増した。
また悲しくなってきた。
考えるの、やめよう。
帰るまで、禁止。

調査のレポートでも作るか、と思ってパソコンの前に座った時、所長室の扉が開いた。
ビクッとした、別に悪いことしてるわけじゃないんだけど、なぜか。

リンさんが出てきた。
まだいてたんだ。
てっきり、私が出たあとにリンさんも例の小部屋に戻ってると思ってた。
リンさんは小部屋に入っていった。
何も言われないのも、逆に怖いよね。
ナルまで出てきた。
また何かを言われるのだろうか。
「真夜」
ナルの声が低く響いた。
「はい」
かろうじて返事だけは返す。
声は掠れてたけど、一応は。
「なぜ、自分より上橋さんの身の安全を優先した」
リンさんあたりが言ったのだろう。
「私の場合、調査中の怪我で済みますが、佳奈さんはナイフを持っていたとはいえ一般の人ですから調査の依頼を請けただけの立場の人間が怪我をさせてはいけないと考えたからです」

「どうしてそれを言わなかった」
「そうして当然だと、思っていました。すいません」
相変わらず白皙の美貌に表情はない。
その後何も言わずに彼は部屋に戻った。
一旦あいた溝はなかなか埋まりはしない。
「私の人生、こんなのばっかりだな……」

第七話　溝

嶋田宅の調査から二週間が経ち、梅雨明けして夏の到来まで後少しという六月。
調査の後、真夜はナルからお茶いれを頼まれなくなり、それによって麻衣の機嫌は良くなり、ナルと真夜の溝は埋まらずにいた。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「麻衣、お茶」
ナルのオーダーに上機嫌で麻衣さんは用意をする。
ナルにお茶をいれなくなってからどれぐらい経っただろう。
仲直りの機会がない。
あったところで疑いが晴れない限り無理だろうし。
思わず溜息が出る。
「どうしたのー、真夜」
「あ、いえ、大丈夫です」
んー、と麻衣さんの気の抜けた返事が返ってきた。
ここ数日を見るに、ナルは自分の疑いについて他のＳＰＲメンバーには話していない

ようだ。
　ということはまだ、確信には至ってないということなのか。
　でも、お茶の一件だけでも避けられてるのは分かる。
　ナルの中では、疑いは限りなく黒に近い灰色で、真っ黒にするための証拠を見つけるまでは泳がそうってとこかな。
「入るよ、ナル」
　盆にティーカップを乗せて麻衣さんが所長室に入った。
「どこ置いたらいい？」
　麻衣さんの声が漏れ聞こえてくる。
　普段ならありえない。
　見たら、扉が少し開いていた。
　盗み聞きなんて良くないと思いつつも聞き耳を立てる。
「ナル、真夜となんかあったの？」
「麻衣には関係ない」
「ナルの事に私が関係なくても、私と真夜は関係あるの！」
「だから？」
「ナルは最近一切真夜にお茶頼まないし、真夜はなんだか落ち込んでるみたい。これで

何にもないっていう方が変だよ。喧嘩でもした？」
「麻衣は、僕が真夜にお茶を頼めば満足なのか」
「そう言うことじゃなくて！」
「要領を得ない話に付き合う暇はない、用が済んだのだから出ていけ」
ナルの冷たい物言いに麻衣さんは何も言えず、落ち込んで所長室から出てきた。
「ねえ、真夜」
いつもにない低いトーンの麻衣さんの声。
「はい」
「ナルと何かあった？」
そう来たか。
「何か、とは？」
こうでも言ってはぐらかすしかなかった。
「うーん、喧嘩とか？」
「そんなことしませんよ」
微笑みながら言えた。
「でも……」
「季節の変わり目でナルも少し機嫌が悪いのかもしれません。時が経てば、またいつも

通りに戻りますよ、きっと」
「そうだよね、うん」
なんとか麻衣さんは納得してくれたようだ。
いつも通り……そんな日来るのだろうか。
私が、私さえ居なくなればいつも通りに戻るだろうな。

突然オフィスの扉が開いた。
来客かと身構えたらぼーさんと綾子さんだった。
「来たぞー麻衣」
「ケーキ持ってきたわよ」
綾子さんの手には、某有名ケーキ店の箱があった。
「ありがとう～綾子！」
麻衣さんが破顔する。
「ちゃんとあんたの分もあるわよ、真夜」
「ありがとうございますっ」
三人の輪に入れずにいた私を自然に入れてくれる、綾子さんには本当に頭が上がらない。

「俺、アイスコーヒー」
「私は、アイスティー」
ラジャーと言って麻衣さんが立ち上がる。
「私も手伝います」
「ありがと」
二人で給湯室にいく。

各自の飲み物が行き渡り、さてケーキを食べようとした時、所長室の扉が開いた。
「ナル坊、邪魔してるぞー」
「麻衣、お茶」
ナルはぼーさんを華麗にスルーして麻衣さんに言う。
麻衣さんは一瞬顔を曇らせたが、了解と言って再び給湯室へ。
そんなのを見逃すはずもない綾子さんが、私を視線で貫く。
目を合わすことはできなかった。
余計に疑いを持たれるとは分かっていたけど。
所長室にお茶を運んで戻ってきた麻衣さんはいつも通りで、何も言われなかったようで安心する。

「ねえ、麻衣。ナルと何かあった？」
「へ？私？」
麻衣さんがキョトンとした顔になる。
「それに、真夜も。あんた何か知ってるでしょ」
知ってるも何も私が原因ですから……ねぇ。
「二人共、私に隠し事なんて十年早いわ。ケーキ食べる前に洗いざらい話なさい」
仕方ないと腹をくくった麻衣さんがまず、今日のことを話した。
「ふーん、なるほどね。今度は真夜の番よ」
「はぁ……」
言うしかないようだ、事実を伝えるわけにはいかないけど。
「最近お茶いれてないなとは思ってましたけど、喧嘩とかはしてませんし、単に麻衣さんのお茶が飲みたい気分なのだと思ってました」
「じゃあ、麻衣が言ってた真夜が落ち込んでるってのは？」
「自覚はありませんでしたが、季節の変わり目ですし疲れでも溜まってたんでしょうか」
嘘ばっかり。
自分が嫌になっていく。
綾子さんはまだ疑いの目を私に向けていた。

「もー綾子！私の勘違いだったんだよ、きっと。もういいじゃん、ケーキ食べようよ」
「まあ、そういうことにしといてあげるわ」
麻衣さんの発言に綾子さんが渋々と納得する。
幸せな時間が崩壊するのは時間の問題かもしれないとケーキを見つめ思った。

第八話　束の間のバカンスと融和

7月。

本格的な夏が始まった。

夏風邪をひき真夜は数日高熱で寝込んでいた。

回復して、真夜はバイトに行ったが誰もいない。

不審に思い、麻衣に電話をかけたところ、「今、吉見宅の調査でＳＰＲは出払ってるの。人手は足りているから自宅待機しといて」とのこと。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

私、真夜はせっかくの休みなら買い物をしようと思い街に出た。

少しメイクをしたら、もう高校生には見えない。

夏のワンピース数着と、夏調査用の通気性と伸縮性を備えた紺のワイシャツを買った。

なぜ、ワンピースかって？

すばり、着るのがめんどくさくないから。

午前中で買い物を終え、午後は数学の勉強。

「ｓｉｎθ……　ｃｏｓθ……」

角度をπラジアンで表すのは、逆にめんどくさくしているように感じるのは私だけ…？

そんな風に数日を過ごし、今日は私は図書館にいる。

平日の図書館は空いていて非常に快適だと思う。

今、サスペンス物を読んでいる。

読みながら、どうしたらこの被害者は殺されずに済んだかを考えるのが面白い。

一見完全犯罪に見える事件を、刑事なり探偵なりが謎解きするのは私にとってはそこまで重要じゃない。

謎解きの中の興味深い情報を頭に止めておく程度だ。

私は刑事にも完全犯罪の犯罪者になる気もない。

だったら、殺されないようにするにはどうすればいいか、それを考えるのが一番生産的だと思う。

今日読んだ本は、ソコソコかな。

ふと見たら、携帯のランプがチカチカとしている。

確認したら、留守電が入っていた。
ナルが倒れたから病院に来て欲しいという内容だった。
急いで図書館から出て、はっとして自分の今日の格好を確認する。
ポニーテール、無地の紺のワンピース、黒のパンプスだった。
スーツじゃないけど、地味だしいけるだろう、きっと。
私は病院に向かった。
「ねえねえ、僕らと遊ばない？」
明るい茶髪の男性二人組に囲まれた。
片方は自転車に乗っていた。
こういう時は、はっきりいうのが良いだろう。
「ごめんなさい、知り合いが病院に運ばれて、今から行かなきゃいけないので」
男性らが顔を見合わせる。
自転車に乗っている方が口を開く。
「それって、マジ？」
「本当です。だから、急いでるんです」
自転車に乗っている方が、少し考えた後、ニカッと笑う。
「よし、分かった。後ろ乗りな」

「え、でも」
歩きの方が騒ぐ。
「お、俺は!?」
「歩いてでも帰ってろ」
自転車に乗っている方が、歩きの方の男性をバッサリ切り捨てる。
肩を落として、彼はトボトボ歩いて去っていった。
迷惑をかけているんじゃないか、私は不安になった。
「でも、悪いです……」
「可愛い子ちゃんと二人乗りなんて男の夢叶えられるなら、どこまでも走るからさ、ほら」
結局乗せてもらうことになった。
「俺、来夢。君は?」
「真夜です」
来夢さんは、ニカッと笑う。
「真夜ちゃんね、ヨロシク☆」
来夢さんは、見た目もキラキラしていたが名前もキラキラだった。
数十分後病院に到着した。

「本当にありがとうございました」
本当にありがったかったので、私は心を込めてお礼を言った。
「いいよ、早く行ってあげな」
自転車の彼に一礼して、私は走った。

第八話　束の間のバカンスと融和

只今、病院の３Ｆ。
廊下の先に人盛り……リンさん達だ。
「遅く、なりました……っ」
走ってきて息の上がっている私を見てリンさんがすまなさそうな表情になる。
「大丈夫です、わざわざ来てもらってすいません」
「いえ。……ナルは？」
「まだ中に……」
リンさんの視線の先には処置中の文字、それはもぎたての苺の様に赤く輝いていた。
「ナルのことも心配ですが、真夜さんに話があります」
リンさんが私の方に向き直りそう言った。
リンさんが歩いていく。
私も追いかけた。
リノリウムの床に二人分の足音が響く。
廊下を曲がった辺りでリンさんが立ち止まる。

「ナルはＰＫを使い、一旦は心停止しました。真夜さんがいなかったからです」
心停止……!?
死にかけたってこと……？
「そ……れは、すいませんでした。肝心な時にいなくて」
「いえ、真夜さんを責めているわけではありません。これで、貴女に予知の能力がないことが分かった」
「へ？」
もしかして、ナルに疑われてた件？
「私はナルがＰＫを使う前にナルから伝言を頼まれました『今、ここに真夜が現れないということは、真夜に予知能力がないということだ。つまり、僕の予想は外れた。すまない、と伝えてくれ』と」
「疑いは晴れて嬉しいですけど、そんなの……遺言みたいじゃないですか」
すまない、はナルの口から聞きたい。
また、お茶をいれたい。
ナル……。
「何言ってるんですか、本人にちゃんと謝らせます。ナルは嫌がるかもしれませんが、必ず」

「そうですね」と言って私はリンさんに笑いかけた。
リンさんも微笑みを返してくれた。
来た道を戻った。
廊下で腕を組んで立っていた綾子さんがこちらを見る。
「二人とも、どこで油売ってんのよ。ナル、もう処置室から出たわよ」
三人でナルの病室へ行った。
病室の窓から光が差す、眩しいと感じた。
ベッドサイドにいた麻衣さんが顔を上げる。
「真夜、遅いよー」
「ごめんなさい、麻衣さん」
「んもぉ」
「真夜さん、夏風邪はもう大丈夫そうですね」
少し日焼けした安原さんが、窓辺に立っていた。
こんなところまで気にかけてくれるところが彼らしい。
「はい、もうバッチリです」
そう私が言った途端、彼のメガネが光った気がする。
「じゃあ、これからこき使えそうですねぇ」

「それは、やめて下さい」
安原さんにこき使われるなんて、どんな目にあうか分からない。
「あはは、嘘ですよ。やだな～」
安原さんの嘘は嘘に聞こえないんですって！
病室を見渡すと、ベッドサイドに麻衣さんと真砂子さん。
彼女達の後ろに綾子さん。
部屋の奥の窓辺に安原さん。
部屋の奥、角にぼーさん。
私とリンさんが出入り口付近にいた。

第八話　束の間のバカンスと融和

「ナルっ！」
麻衣さんの声で、皆が一斉にナルの方を見る。
ナルの瞼が薄らと開いていた。
「ナル！ナル……。良かった。ナルはＰＫ使った後倒れて、今は病院にいるんだよ」
ナルは視線を麻衣さんに向ける。
「見れば、分かる」
この調子なら、大丈夫そうだ。目覚めから毒舌が炸裂している。
「本当に心配しましたのよ」
整った眉をハの字にして真砂子さんが言った。
「もう、大丈夫ですから」
相変わらず、ナルは素っ気ない。
「ナル、お茶入れるね」
「たまには、わたくしがっ」
「私の仕事取らないでー」

麻衣さんと真砂子さんがじゃれあっていた。
「ねぇ、ナル、茶葉リクエストある？」
笑顔の麻衣さんに、ナルは顔を横に振る。
麻衣さんの表情が曇る。
「リン」
ナルはただそう名を呼んだだけだが、リンさんは全てを理解し頷く。
「私は、ナルの着替えを取りに車を出すので、皆さんそれに乗ってください」
リンさんが朗々とした声で言う。
「え……でもまだナルが目覚めたばかりなのに？」
「そうですわ。もう少しいてもよいのでは」
不満そうな麻衣さんと真砂子さんの肩に綾子さんが手を置く。
「歩いて帰りたくなかったら言うこと聞く！」
「えー！」
ぞろぞろと出ていき、病室にはナルと私、真夜だけになった。
少し日が傾いてきていた。
少しの沈黙のあと最初に口を開いたのは私だった。
「肝心な時に、いなくてすいませんでした。私が補助できれはこんなことにはならな

かったのに……」
　ナルの黒い瞳が揺れる。
「なぜ……僕を責めない」
「……なぜ、なんでしょう」
　ナルの眉間に皺がよる。でも、私は続ける。
「今、こうしてナルが生きててくれて嬉しいと、思っています。……だからでしょうか」
　私にも責めない理由なんて分からない。
　ただ、今はそういう気分になれなかった。
「理解、できない」
「してもらおうとは思ってません」
　ナルにも私にも、普通の人が持ってる何かが足りない。
　分かり合うのは、きっと難しいだろう。
「一方的に責めて悪かった。あの日、助けてくれて……ありがとう」
　ナルはこちらを見ない。
　プライドの高いナルの珍しい言葉に少しばかり驚いてしまう。
「私はナルにＳＰＲで雇っていただいて、そのことにすごく感謝してます。きっと、それでトントンです。こちらこそありがとうございます」

西日が病室を照らす。
白い壁に私の影が長く伸びた。
「真夜のお茶が飲みたい」
ナルがそう唐突に言った。
いつぶりだろうか。
なぜ、こんなに嬉しいのだろう。
思わず明るい声が出る。
「わかりました」

第九話　似て非ざるもの

七月下旬、夏休みの季節。
そして、ホラーの季節。
調査の一番入りやすい季節でもある。
ＳＰＲの扉の前に学生服男子と女性がいた。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
「失礼します」
男子生徒と女性が入ってきた。
「どうぞ」
座るよう勧める。
「こちらは、心霊などの調査をされていると聞いて本日は参りました」
冷やかしではなさそうだ。
麻衣さんが紅茶を用意しに給湯室へ、安原さんが紙とペンを持って私の隣に腰掛けた。
「はい、どういったご用件でしょうか」

「私は光ヶ丘第一高校の教師で演劇部の顧問をしている花燈（かとう）　芽以（めい）です。部員の生徒がおかしくなる件を調査して頂きたいのです。詳しい説明は演劇部部長の新城から聞いて下さい」

花燈先生が隣の男子を手で示す。

「僕が部長の新城（あらき）　徹（とおる）です。昨年度の三月から今までで部員が三人亡くなっています。死因は異なるのですが、亡くなる少し前に三人とも呪いだって言っているんです。本当に呪いなのか、もし呪いならそれを解いて欲しいのです」

麻衣さんが紅茶を置く。

「依頼内容は分かりました。依頼者は花燈先生ということで構いませんか？また、今回の件は学校長の許可をとれているのでしょうか」

「依頼者は私で大丈夫です。学校長の許可はとっていません。私の高校は顧問の許可があれば他校と合同の部活練習が出来るのでその制度を使おうと思っています」

安原さんと顔を見合わせる。

「所長に聞いてきます」

安原さんが所長室へ行った。

「所長の許可が出たら調査させて頂きます」

「許可が降りなかったら？」

新城くんが聞いてきた。
「その時は依頼をお受けすることはできません」
所長室からナルと安原さんが出てきた。
「いくつか条件をつけても良いのなら依頼者をお受けします」
ナルはそう言って、私の隣に座った。
「条件とは……？」
「学校との仲介役は全て花燈さんにお願いします。またいかなる揉め事がＳＰＲと学校とあったときも責任者は花燈さんということでお願いします。それが条件です」
「分かりました」
私は安原さんに席を譲り、ナルがいくつかの質問をし、安原さんがメモをとっていた。
こうして、ＳＰＲの調査が始まった。

他校ということで制服がいることになった。
「真夜は、通信制だけど制服あるの？」
麻衣さんが聞いてきた。
「ありますよ」
「えええええっ！」

そんなに驚くことなのだろうか。
「通信制でも入学式とかはありますし、年に5回ぐらいは登校します」
「真夜の制服姿見たい！」
「調査の時を楽しみしててください」
夏服はセーラーだし、けっこうどこにでもある制服なんだけど。
「ナルはどうするんでしょうね」
「所長……制服無さそうですよね」
安原さんが考え込んでいる。
一体何を着せる気なんだ……？
「僕の兄貴のを貸そうかな……フフフっ」
安原さん……。